

第5章 工 芸



【プロフィール】

宮入小左衛門行平

(みやいりこざえもんゆきひら)

1957年生まれ 坂城町出身

1977年 父・宮入行平（人間国宝）に師事

1982年 美術刀剣類製作承認を受ける

2010年 第62回伊勢神宮式年遷宮において御
神宝太刀を調製2013年 お守り刀展覧会において文部科学大
臣賞受賞

2019年 全日本刀匠会 会長

趣味は散歩、読書

座右の銘「炎に祈る」

現代に生きる「刀匠」

受け継がれた技で新たな時代を切り拓く

宮入鍛刀道場 刀匠 **宮入小左衛門行平**

Miyairi Kozaemon Yukihira



白装束に身を包み、1300℃に達する高温の炉に向かう

坂城の地は、中世、信濃村上氏が栄え、戦国時代には村上義清と武田氏との攻防が繰り返された。義清の居城・葛尾城跡や開畝製鉄（たたら製鉄）遺跡からは、武士が躍動した時代の面影が偲ばれる。そのような坂城町において、今なお、武士の魂ともいえるべき日本刀の作刀に取り組む「刀匠」がいる。

白装束に身を包み、燃え上がる炉に向かい、赤く熱せられた鉄に槌を振るうその姿は、まさにものづくりの原点だ。

宮入小左衛門行平（本名・宮入恵）さんは、坂城町で鍛冶屋を家業とする宮入家4代目の刀匠だ。

宮入さんの父である故・宮入行平刀匠は、昭和38年（1963）に重要無形文化財保持者いわゆる人間国宝に認定された名匠で、坂城町の「鉄の展示館」は、行平刀匠の功績と坂城の製鉄の歴史を後世に伝えるために平成14年（2002）に設立されたものだ。

宮入さんは、平成8年（1996）に父であり師でもある「行平」と曾祖父「小左衛門」の両方の刀工名を受け継ぎ、小左衛門行平と改名。その後の業績は目覚ましく、数々の刀職展で受賞を重ね、平成12年（2000）には、財団法人（現・公益財団法人）日本美術刀剣保存協会から最高峰の刀匠に与えられる「無鑑査」の資格を授与されている。平成30年（2018）には、公益財団法人日本刀文化振興協会から「日本刀名匠」に認定され、現代刀匠の第一線に立っている。

「刀鍛冶の栄枯は時代とともにある」と宮入さんは語る。

武士の台頭とともに日本刀は隆盛を極め、各地でさまざまな流派の刀鍛冶が実



戦の武器にとどまらず、芸術の域にまで作刀技術を高めた。

明治に入ると、廃刀令により日本刀需要は激減し、古来の製鉄技法である「たたら製鉄」も衰退していった。しかし、昭和になり、戦時下に突入すると、再び刀剣（軍刀）の需要が増大、多くの刀鍛冶が軍刀の製作に従事することとなった。

戦後、刀剣は、GHQにより接収され、民間所持が制限される。武器としての刀剣需要は消滅し、日本刀は美術品としての価値を残すのみとなった。作刀を行うためには国の認可が必要になり、刀



槌を振るい、刀身を鍛え上げていく

鍛冶の数も次第に減少していく。

宮入さんは、昭和52年（1977）

に本格的にこの道に入り、昭和58年（1983）に独立するが、戦後間もなくのころに約500人いた刀匠は、300人ほどに減っていたという。現在、長野県内では、宮入さんと5代目の御子息を含めてわずか6人だけだという。

先代の父・行平刀匠が多くの優れた弟子を輩出したように、宮入さんも後進の育成に力を尽くしている。平成18年（2006）

には鍛刀道場傳習館を建設し、多くの弟子が作刀の修練に励んでいる。

刀匠の減少とともに、歴史と伝統ある日本刀文化が失われることのないよう、現代の刀匠には「柔軟な思考」が求められるのではないかと宮入さんは語る。

宮入さんは、「全日本刀匠会」の役職を長く務め（令和元年から会長）、日本刀の魅力の普及にも尽力している。特にアニメーション作品とのコラボレーション

ンなど、従来の刀工界では「職人がやることではない」と忌避されてきた企画も実現してきた。

「職人は黙って仕事をしていればいいなんて言われましたが、今はそんな時代ではないですから」と話す。

特に、アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」とコラボレーションした「エヴァンゲリオンと日本刀展」の企画では、宮入さんをはじめ全国の刀匠がアニメ作品をモチーフにした武器・刀を再現し、鉄の展示館を含め、国内外を巡回する大人気イベントとなった。

また、平成27年（2015）に発表されたオンラインゲーム「刀剣乱舞」のヒットによる日本刀ブームは、日本刀の新たなファンの獲得の大きな後押しになった。ブームの中心となったのは、「刀剣女子」と呼ばれる若い女性ファンたちだ。「正宗」や「村正」といった名刀の数々を擬人化したこのゲームは、それまで日本刀とは縁遠いと思われていた若い女性が日本刀に関心を抱くきっかけとなった。鉄の展示館でも、女性の刀剣ファンが増え、女性向けイベントが開催されるまでになっている。

こうしたサブカルチャーと日本刀との



日本刀の材料となる玉鋼

融合による人気を肌で感じた宮入さんだが、最初は一過性のブームだと静観していたそうだ。ところが「いまだにブームがやみません。まさか日本刀専門の週刊誌が出るようになるなんて思わないですよ（笑）」と驚きつつ、「日本刀って一般的には近寄りがたいというイメージがあります。日本刀をなじみあるものにしてくれたことに何より価値がある」と一連のブームを評価する。

日本刀ファンの裾野を広げるきっかけとして、鉄の展示館にも大きな出来事があった。同館には、刀剣乱舞にも登場する江戸時代の刀匠・堀川國廣の刀（脇差）が所蔵されている。これは、平成26年（2014）に亡くなった俳優・高倉健さんの所蔵品であったものだ。高倉さんが生前、宮入さんと親交があった縁か

ら、平成27年（2015）に高倉さんの遺族から同館が譲り受けた貴重な一振だ。同年に開催された高倉さんの所蔵品の展示会には、高倉の健さんファンからゲームで刀剣に興味をもった若いファンまで幅広い世代のお客さんが訪れ大いに賑わった。

現在、宮入さんは、首都圏を中心に、3年おきに個展を開催している。個展には二十振ほど作品を揃える。名匠の作品を求めて海外からの顧客も多いそうだ。

宮入さんの作品へのこだわりは、刀身だけでなく拵こしらえといわれる外装にも及ぶ。持ち手の柄、鐔、刀身を収める鞘、紐を結う職人まで10人以上の職人が関わり、一振の刀が完成するまでには、およそ半年の時間がかかるという。

「今の刀匠は、ただの職人というだけでなく、大工の棟梁みたいな役割がある。関係する職人の皆さんとの調整や進行管理など、コーディネートする役目です。だから、展示会に向けて準備しているときは結構大変で、終わるともうやりたくないと思うんです。でも、やることで新たな出会いがあるし、結局作ることが好きで、頭の中に次に作りたいものがあるから、またやっちゃうんですよ（笑）」

1300℃にも達する炉の前に鎮座し、振り上げた槌で、玉鋼に活を入れる。表情は炎に赤々と照らされ、その眼差しは日本刀の未来をも見据えているようだ。現代を生きる刀匠の技には、文字どおり時代を切り拓く力が宿っていた。



高倉健さんのために宮入さんが作り上げた「縁の刀」「刀銘 信濃住宮入恵作／平成七乙亥年卯月／高倉健佩刀」（宮入小左衛門行平氏 所蔵）



【プロフィール】

片山和人（かたやまかずと）

1979年生まれ 坂城町出身

2000～2006年（株）ウッドテック秋富勤務

2006年 家業である片山木工所に従事

2009年 片山木工所 代表

小さな木片で織りなす壮大な世界 見る人に幸せをもたらす「信州組子」

片山木工所
代表

片山和人

Katayama Kazuto



木片を組み合わせて作った「葉」と呼ばれる部品

最近ではほとんど聞かなくなった日本固有の計測単位である尺貫法。それで表される一分とは十厘、わずか3ミリ程の大きさだ（正確には3・0303ミリ）。「一寸の虫にも五分の魂」という諺にも出てくる五分とは約15ミリ。組子細工は、その五分よりも小さい「葉」と呼ばれる細工を施した木片を組み合わせさまざまな模様を作り上げる伝統技術だ。そ

の定義を組子細工職人の片山和人さんこう語る。

「厳密な定義があるわけではないのですが、僕が言う『組子』とは三分（約9ミリ）までの木工細工を組み合わせたもの。それ以上の大きさのものは『格子』だと思っています」

釘を用いることなく小さな木片を組み合わせ模様を描き出す「組子細工」。片山さんの作品を目の当たりにすれば、描き出された稀有壮大な世界観に誰もが圧倒されるに違いない。

片山さんが組子細工を目にしたのは中学生のころ。初めて目にした、その木で作られた芸術品に心を奪われたという。

「県内の建具職人の方が作られた龍を模した組子細工でした。まあ、今振り返ってみれば、あのときに『自分もいつかこんな作品を作りたい』という気持ちが芽生えたのかな、とも思うけれどそのころは自分も多感な時期だったから（笑）。親父の家業とは距離を置きたい気持ちがあったんです」



微細な葉を手作業で組み込んでいく

そう語るとおり、片山さんの実家は木工所を営んでいた。幼いころから木と慣れ親しむ生活を過ごしていたが、3兄弟の末っ子ということもあり自分が親の跡を継ぐ考えはなかったのだそう。

「でも、長兄は左利きだったんですよ。木工の世界は工具も右利き用に作られて



第52回全国建具展示会にて全国商工会連合会会長賞を受賞した「間仕切戸」

いるから左利きだと怪我しやすかったりするんですね。そんな事情もいろいろとあり、僕が松本技術専門校の木工科（当時）で技術を学ぶ道を選択しました」

もともと木工という道が合っていたのだろう。同校を卒業後は真田にある木製サッシを扱う会社に勤め、中央職業能力開発協会が主催する技能五輪全国大会に出場。初参加で2位を獲得すると、連続出場した翌年には見事優勝を果たす。



第48回全国建具展示会にて長野県議会議長賞を受賞した「間仕切戸」

「周りからは『優勝したからって天狗になるなよ』とよく言われました（笑）。ただ、この優勝が自分の中ではひと区切りとなつて、そろそろ実家の木工所に戻ろうかな、と思ったんです」

こうして本格的に木工職人としての道を歩み始めた片山さんだが、組子細工は仕事ではないと語る。

「僕の仕事はあくまで建具工で、組子は趣味。これが仕事だと思つたらできませんよ（苦笑）。でも趣味の延長が仕事になって報酬もいただける。考えてみたら最高ですよ、これ（笑）」

仕事でないとはいえ、真剣に向き合い手を抜くことは決してない。一つの作品につき1年程度は構想を練る。

「どのような作品にするか、もう毎日ずっと考えています。考えに考え抜いたうえで作業に取り掛かりますが、途中で投げ出したくなることだってありますよ（笑）。でも、出来上がるまでの過程が苦しければ苦しいほど完成した作品に愛着も生まれます。苦労して作った作品をお客さまに納めるときは、娘を嫁入りさせる父親のような気持ち（笑）」

実際に片山さんが手掛けた組子細工が配されたお宅を訪ねたことがある。その引き戸は違和感なく部屋に溶け込み、しかし見事な存在感で見入る人を魅了していた。「見事なものです」そこから会話は弾み、人同士の和を為す一助となる。家主のおもてなしの気持ちがそこには込められているのかもしれない。

「建具は生活の一部。見ていて飽きないことが大事。主張しすぎるのは違うかなと思つています。組子細工には表もあれば裏もある。どちら側から見るとかで見



一つの作品を仕上げるまで、構想から2年もの歳月を要することもある

え方も変わるし、時間がもたらす環境の明暗、そして正面や斜めといった角度でも見え方は変わる。人それぞれの目線や明るさで見え方が変わる組子細工。その中に日本らしい侘び寂びの世界を表現したいと思っています」

そんな片山さんが今、新たに取り組んでいるのが「信州組子」を世に広める活

動。木曾の木材など県内産材にこだわるのはもちろん、材料となる木材に安易に着色することなく、その木が本来持っている味わいや地の色を生かしさまざまな模様を表現するのだが、作られた木工品はまさに「木の芸術品」とも呼べる逸品揃いだ。

「木というのは、育ち方や保管された状態によって色も千差万別。その木ならではの味わいを形にして届けたい、という思いがこもった取り組みです。だからこそ材料の木が大事。材木商の方から『こんな色の木が出たけど』なんて連絡が入ればすぐに駆けつけますよ（笑）」

欄間や引き戸といった大型の建具だけではなく、いつでも身につけて持ち運べる「信州組子の名刺入れ」という変わり種も作ってしまうのが柔軟な発想を持つ片山さんならではの。

「社会人にとっての名刺は、いわば『自分の分身』。そんな大切なものをもっておく宝箱としての意味合いを持っているのがこの組子細工の名刺入れです。この名刺入れ、使うとビジネス上の習慣で

ある名刺交換にも新しいストーリーが生まれるような気がしませんか？（笑）」

とかく無味乾燥になりがちなビジネスの場に和みと微笑みをもたらす組子細工。「変わった名刺入れをお持ちですね」「実はこれ……」などと話も弾み、もしかしたら商談成立にひと役買うやもしれない。作品の大きさは変われど、根底に流れるのはもてなしの心。それは決して変わることはない。



信州組子の名刺入れ